



I—太陽と月 (京都に於る値)

日附	日出日没 (星座)		日附	月 齢	月 出	月 没	(星 座)
	時 分	時 分		(正午)			
日	時	分	日	日	時	分	時
1	5:45	18:17	1	19.3	23:15	8:31	(蛇 遣)
6	5:39	18:21	2	20.3	—	9:18	”
11	5:32	18:25	3	21.3	0:4	10:10	(い ” て)
16	5:25	18:29	4	22.3	0:50	11:6	”
21	5:19	18:33	5	23.3	1:34	12:3	(や ” ぎ)
26	5:13	18:37	6	24.3	2:10	13:4	”
			7	25.3	2:46	14:7	”
			8	26.3	3:20	15:11	(みづがめ)
			9	27.3	3:54	16:18	”
			10	28.3	4:29	17:27	(う ” を)
			11	29.3	5:6	18:39	”
			12	0.9	5:47	19:51	(ひ ” じ)
			13	1.9	6:33	21:3	”
			14	2.9	7:26	22:11	(う ” し)
			15	3.9	8:24	23:13	”
			16	4.9	9:27	—	(ふ ” ぞ)
			17	5.9	10:31	0:7	”
			18	6.9	11:36	0:52	(か ” に)
			19	7.9	12:39	1:32	”
			20	8.9	13:39	2:7	(し ” し)
			21	9.9	14:38	2:39	”
			22	10.9	15:36	3:8	”
			23	11.9	16:33	3:37	(を ” とめ)
			24	12.9	17:30	4:7	”
			25	13.9	18:27	4:38	”
			26	14.9	19:22	5:12	(でんびん)
			27	15.9	20:17	5:49	”
			28	16.9	21:10	6:30	(さ ” り)
			29	17.9	21:59	7:15	(蛇 遣)
			30	18.9	22:46	8:4	(い ” て)

II—天象

日	時	天象
5, 11		水星が月と合(南3°)
8, 0		水星が金星と合(南7°)
10, 7		土星が月と合(南8°)
12, 5		金星が月と合(北4°)
12, 17		水星が天王星と合(北2°)
12, 20		天王星が月と合(南4°)
12, 20		水星が月と合(南1°)
14, 13		火星が停留
18, 10		金星が内合
20, 11		水星が東方極大離角(20°)
22, 6		海王星が月と合(北7°)
28, 12		火星が月と合(北1°)
30, 18		天王星が會合

下弦	4日, 12時:53分
上弦	18日, 5時:34分
近地点通過	12日, 17時

新月	11日, 14時:10分
満月	26日, 0時:24分
遠地点通過	27日, 19時

主な流星群

日 附	赤 緯	赤 緯	附近の星	性 質
16日—25日	213°	-10°	をとめ座南部	緩, 火球
20日—22日	270	+33	こと座西部	速, 顯著
30日 頃	291	+58	りゅう座東部	稍 緩

遊 星 界 (4 月)

水星 先月25日に外合してから後は宵の西天の星となる。視直徑は $5''.2$ から、 $10''.1$ まで増大し、20日に東方極大離角の頃が観望には絶好である。その頃を望遠鏡で見れば、直徑 $7''.8$ で、形は大體5日月位に缺けて見える。光度は $+0.5$ 等級であるから肉眼でも探し出す事が出来る。位置は ζ ひつじ座を東進中。

金星 先月27日に停留となつてからは逆行を始めて。本月一ぱいは西へ西へと約1時間運行する。今まで長らく西天の明星として輝いてゐたが、18日に太陽と内合で、以後は東天に移る。従つて本月は観望には適しない。

火星 愈々観望の時期となつて來た。位置は δ さそり座の北東部で、夜半には東天に高い。14日に停留となつてからは逆行に移る。目下地球にぐんぐん接近しつつあるので、光度は -0.4 より -1.3 等級に増大。視直徑も $12''.1$ より $16''.2$ になる。來月下旬の最接近も迫り表面觀察の絶好期。

木星 ι いて座の東部を東進中で、光度 -1.8 等級。視直徑は約 $38''$ 。次第に太陽より遅れて16日には西矩となるから、夜半頃から東天に見える様になつて來る。

土星 位置は ρ うを座で曉の東天ではあるが、まだ太陽に近く、今しばらくは駄目。

天王星 宵の西天に低く、月末には太陽と會合で観測不能。

海王星 宵の南天 δ しし座 λ 星附近を逆行中で、まだ観望にはよい。但し光度は7.7等であるから、望遠鏡が必要。

冥王星 大望遠鏡でも實視観測は困難である。

× × × × ×

星座 銀河は西空に低くなつて、誇らしい冬の星座の大部分が既に没し去つたので、可成り寂漠を感ずる様になつた。けれども、春の星座を代表する δ しし座や ρ うをとめ座が我が物顔に中天にをさまり、春霞を思はせる様なのかな景色である。殊にレグルスやスピカの青白色、アクトニウスの赤き輝き等は、地上の花を聯想させる星々である。(星見山人)